

■ 目先はドルの戻り余地を探る時間帯

結局、米国の利下げサイクルは政策金利を0.5%ポイント引き下げるところからのスタートとなった。昨日（18日）まで行われていた米連邦公開市場委員会（FOMC）では、利下げ幅を通常よりも大きくとることとなったが、参加メンバーらの金利見通しは「年内あと2回の会合で計0.5%ポイントの利下げ」が中央値となり、年内は9月分を含めて計1.0%ポイントという従来からの米利下げ観測の範囲内に留まることとなった。

また、FOMC後の会見では米連邦準備理事会（FRB）のパウエル議長が今後の利下げは急がない姿勢を強調しており、今回は「通常より大幅な利下げ」と「市場予想通りの年内利下げの合計幅」、「ハト派になびき過ぎていない議長発言」の「合わせ技」により、トータルで考えると市場の事前の織り込み分を超えるものにはならなかった。ある意味、絶妙な匙加減であったと言え、結果的にドルは下へ「往って来い」の反応を示していた。



ドル/円については、米利下げ幅が明らかになった後に一時140.44円処まで下落するも、ほどなく切り返して142円台後半の水準まで値を戻す展開。結果、左図に見る通り、ドル/円の週足ロウソクは一目均衡表の週足「雲」下限水準で何とか踏み止まる格好となっている。

ちなみに、昨年1月安値（＝127.22円）から今年7月高値（＝161.95円）までの上昇に対する61.8%押しの水準が昨日の安値とほぼ同水準で、それは昨年12月安値（＝140.25円）に顔合わせする水準でもある。つまり、ドル/円の140円台前半の水準というのは一つの重要な節目として意識されやすいところであり、今後も一つの下値の目安となり得る。

とまれ、今回は事前に市場が「考えられるなかで最もハト派寄りの利下げ幅」を織り込むこととなった点が重要である。一頃は「9月を含めた年内3回の会合で1.25%ポイントの利下げもあり得る」との声も聞かれていたわけで、そこまでをほぼ織り込んだ結果がドル/円の直近安値＝139.58円であるとするならば、当面の下値余地は自ずと限られてくるに違いない。

むしろ、目先は戻りの目安を考えておく必要があると思われ、それは一つに9月3日高値から直近（16日）安値までの下げに対する半値（50%）戻し＝143.40円処から61.8%戻し＝144.30円処ということになるだろうか。とくに、9月3日高値からの下落局面では143.40-50円処で一旦もみ合った経緯があることから、同水準付近まで戻ったところは打診的に戻り売りで対応したいと個人的には考える。

むしろ、当面のドル/円の値動きに関しては米・日株価の行方次第というところも依然としてある。本日（19日）の東京株式市場は、ドル/円の反発を横睨みしながらの大幅高商状となっている（執筆時）となっているが、年内の米利下げ見通し幅が想定内からそれ以下に留まっている現状では、米国株の当面の上値余地が限られてくる可能性も高い。

また、昨日のユーロ/ドルは日足ロウソクが長い上ヒゲを伴う格好となったものの、前日終値比では若干のプラスとなった。FRBによる米利下げは「年内あと2回で0.5%ポイント」に留まる見通しとなったが、欧州中央銀行（ECB）の今後の利下げペースがより緩慢になると見られている以上、対ユーロでのドルがやや劣勢であることに変わりはない。当面は、ユーロ圏におけるインフレの粘着性の強弱からも目が離せない。
(09月19日 10:00)